



## 文学でも絵画でもない“ベルリン派”の新しい定義とは

TEXT：羽生和仁

た またま入ったカフェで親しく日本語で語りかけてくるドイツ人。挙げ句には、日本人が登場するテレビコマーシャルが4種類もあったドイツ。日本に対するシンパシーや貪欲な日本文化への探求心が溢れ返っている。アメリカ発の噂では、日本のニュースは世界にとっては取るに足らない物だと聞かすが、ここドイツでは決してそうではなさそうだ。

音楽シーンに身を置く者として、やはり業界での日本人の立場はどうかというのも気になる。最新の動きとしては、拠点をベルリンに置く日本人アーティストの急増と、ベルリンのレーベルの存在が、ひとつのジャンルとも言えるムーブメントを築き始めていることだ。それを“渋谷系”ならぬ“ベルリン派”という言葉で象徴する人々も現れている。

レーベルではまず高木正勝とトオヤマタケオをリリースしたカラオケカルク。そしてドイツ有力誌『DE:BUG』で「今年からは日本人音楽家の世紀となるだろう」と評論され手放しでその作品が絶賛された kashiwa daisuke の所属レーベル、onpa。このようなレーベルが、日本在住のアーティストでもベルリン派に成り得る可能性をもたらした。またアメリカのジョン・テハダとのテクノユニット、I'm Not a Gun としても有名な西本毅はベルリン在住で、ベルリン拠点の City Centre Offices からリリースを重ねるベルリン派最重要人物だ。

欧州で着々と頭角を表す日独混合ユニット、ラップトップオーケスター。そこには宮崎申太郎なる日本人メンバーがおり、彼の呼び掛けの下、実験音楽家の堀哲也、ノイズパフォーマーの森本誠士、ラップトッププレイヤーでもありターンテーブルリストでもある Lambent ことアキラ、イギリスのモティアからリリースしている el fog ことフジタマサヨシ、そしてドイツ人と日本人の男女のエレクトロニカデュオ、フレックフミアなどが、彼らのイベント等にジョイントしている。この面々はベルリンで最もシーンを牽引している日本人アーティスト達だ。

特筆すべきは、ラップトップオーケスターの宮崎申太郎は『la condition japonaise』というタイトルのイベントのオーガナイザーで、今ベルリン派と巷で言われ始めた上述の全アーティストをいち早くキュレートしている人物でもある。そのイベント会場となっているクラブ“エレクトロニック・チャーチ”は今後、シーンの象徴的な場所になるだろう。日本人が海外のレーベルからリリースされることもそう珍しい時代ではない。今後はその内容と影響力に期待してもよい時代だ。以前は、福岡発のめんたいロックシーンだったり、東京の渋谷系と言われたシーンのように、日本の中のグローバルな視点から日本の音楽シーンが醸成されてきた。今後は日本人にとってのグローバルなシーンとしても、このベルリン派に期待してみるのとはとても夢のある話ではないか。

### INTERVIEW & PICK UP



VERSIONS OF THE PREPARED PIANO  
HAUSCHKA  
[KARAOKE KALK  
KALKCD38]

< NEW AGE, POPS >



april.#07  
kashiwa daisuke  
[onpa MMOP-CD004]

< NEW AGE >